

# 数量詞についての一考察

林 文 賢

## 目 録

- 0. 始めに
- 1. 数量詞の分佈状況
- 2. 数量詞の本質
- 3. 数量詞句の共起制限
- 4. 結びに
- 註釈
- 主な参考文献

### 0. 始めに

数量詞は、名詞と同じように結尾変化なし、ということでは言いがた。いされて今日に至った。しかし、分佈状況を見てみると、数量詞は名詞にではなく、形容詞或いは形容動詞に類似していることを発見する。

小論では、数量詞を形容詞・形容動詞とを関連づけ、Jespersen氏が唱えた「ネクサス」(nexus)という概念を導入して、数量詞の本質をつきとめた。

それから、数量詞の共起制限について、これまでうまく処理できなかった統語範疇、格範疇をほりさげて、井上和子氏の提案による「述語の意味素性による格」をもって、共起制限を記述した。おしまいは、数量詞は、形態上、体言に属しているが、意味の面から見ると、用言として機能しているとむすんだ。

### 1. 数量詞の分佈状況

数量詞の出現場所を、形容詞・形容動詞のそれに比べると、三者の類似性が目に付く。

- ① 太郎ハ 本ヲ 三冊 買ッタ。  
 ② 太郎ハ 本ヲ 安ク 買ッタ。  
 ③ 太郎ハ 本ヲ 簡單ニ 買ッタ。  
 ④ 太郎ハ 三冊ノ 本ヲ 買ッタ。  
 ⑤ 太郎ハ 安イ 本ヲ 買ッタ。  
 ⑥ 太郎ハ 簡單ナ 本ヲ 買ッタ。  
 ⑦ 三冊 太郎ハ 本ヲ 買ッタ。  
 ⑧ 安ク 太郎ハ 本ヲ 買ッタ。(註1)  
 ⑨ 簡單ニ 太郎ハ 本ヲ 買ッタ。

類似はこれぐらいに止まらず、三者とも名詞として使われるところにも類似がある。例えば、

- ⑩ 昨日 買ッタ三冊ハ 小説ダ。  
 ⑪ 安サニ吊ラレテ、ツイ 買ッテシマッタ。  
 ⑫ 余リノ簡單サニ 驚イタ。  
 ⑬ 太郎ハ 本ノ三冊ヲ 買ッタ。  
 ⑭ 太郎ハ 本ノ安サヲ 買ッタ。  
 ⑮ 太郎ハ 本ノ簡單サヲ 買ッタ。

さて、その差異は、といえは、

- ⑯ 太郎ハ 本三冊ヲ 買ッタ。  
 ⑰ 太郎ハ 本安サヲ 買ッタ。  
 ⑱ 太郎ハ 本簡單サヲ 買ッタ。  
 ⑲ 太郎ハ 本三冊ヲ 買ッタ。

- ⑳\* 太郎ハ 本安イヲ 買ッタ。  
 ㉑\* 太郎ハ 本簡單ヲ 買ッタ。

のような場合がある。しかし、この差異は、下線部分の語構成が違ふところに由つて来たものと思う。例文⑯、⑰、⑱からなる組は、その下線部分が「名詞＋名詞」の構造をなしているが、ほりさげていけば、

- ⑯' 本三冊 ↓ 「名詞＋名詞」  
 ⑰' \* 本やすさ ↓ 「名詞＋名詞」 ↓ 「名詞＋形容詞語幹＋さ」  
 ⑱' \* 本簡單さ ↓ 「名詞＋名詞」 ↓ 「名詞＋形容動詞語幹＋さ」

のように違ってくる。そこが数詞の特色である。

奥津敬一郎氏は、この特色に目をつけ、「三冊」という数量詞を、「本」という本名詞の、一種の同格名詞であると分析し、次のように言っている。

すでに見たように「本」と「3冊」とは同じ文脈の中で単独でも目的語となり得るし、連体修飾も承けることができる。つまりこの2つの名詞はその文法的機能からみて同格なのであり、その結合体としての「本3冊」は一種の同格名詞構造を持つと考えられる。また、意味の上から見ても、「本」はこの語によって示される対象物のいわば質的側面を表わし、「3冊」は同じ対象物を数量の面から表現している。要はどちらも同一物を指示する名詞であり、意味の上からも同格である。これは通常の同格名詞、例えば、「總理大臣 佐藤栄作」が、同一人物を表現するのに、一方はその人物の固有の姓名を、他方はその職名を以てするのと同様であろう。(註2)

たしかに奥津氏の云つた通り、「本三冊」においては「本」と「三冊」は同格名詞関係にあるという一側面を持っているが、数詞同格名詞説だけで行くと、例文 19、20、21 からなる組の下線部に對し、解釈がつかないのである。例文 19、20、21 の組の下線部は、次のような構造を有する。

⑲ 本三冊 ↓ (名詞 + x)

⑳ 本安イ ↓ (名詞 + 形容詞)

㉑ 本簡單 ↓ (名詞 + 形容動詞)

「(名詞 + x)」の x とは、正体不明のことを意味するのである。しかし、これは名詞或いは同格名詞でないことが、後で説明する Jespersen の「ネクサス」(nexus) で分る。

なお、例文 ⑯ と ⑲

⑯ 太郎ハ 本三冊ヲ 買ッタ。

⑲ 太郎ハ 本三冊ヲ 買ッタ。

は、形態的には同じように見えるが、文法的には先に述べたように

⑯ 本三冊 ↓ (名詞 + 名詞)

⑲ 本三冊 ↓ (名詞 + x)

のような違いを持っている。この「x」の性質が、名詞ではなく、形容詞或いは形容動詞に近いことは、次節で説明する。

## 2. 数量詞の本質

池上嘉彦氏は、その著『意味論』において Jespersen の「ネクサス」(nexus) の概念に触れ、次のように書いている。

Jespersen によつて「ネクサス」とは主語述語関係のことであり、Jespersen はこれを意味関係と考えて関係的には特に主語述語という表現になっていないいろいろな場合に「ネクサス」を認めたのである。たとえば、I saw him run の him run の部分では him が意味上の主語で run がそれに対する述語に相当するから一つのネクサスである。(註 3)

この「ネクサス」の概念を念頭において、もう一度

⑯ 太郎ハ 本三冊ヲ 買ッタ。

を考えてみると、「本三冊」も一つの「ネクサス」ではないかと思われる。即ち、「本」と「三冊」とは「主語述語の関係」にあるのである。「本」は名詞である以上、「三冊」は当然、「本」について何かを述べているところの、「述語」である。

「三冊」という数量詞が述語で、しかも、この述語の分佈状況が、形容詞・形容動詞のそれに似かよっているから、数量詞も形容詞或いは形容詞の範疇に属すると見てもよからうかと思う。こうなってくると、先に述べたところの「名詞 + x」の x は、形容詞或いは形容動詞に近いことが明らかになる。つまり、「三冊」という数量詞を用言と見てもさしつかえないのである。

さて、いよいよ数量詞の本質であるが、「本三冊」の「本」は、ある概念を表わしているから、当然体言範疇に入る。そして、「三冊」の「冊」は「本」という概念の概念、いわば高次概念であるが、やはりそれを概念と見てもさしつかえないと思う。となると、「三冊」は用言として認められる以上、その「冊」が体言として表わされる概念であるから、その「三」は用言でなければならぬことに

なる。「三」と「冊」とによって合成された「三冊」は、一方には  
用言として実現し、他方には体言として実現するものむしろ当然の  
ことである。

煎じつめていえば、数詞と量詞からなる数量詞が体言として扱わ  
れたのは、量詞の体言性が大いに認められ、数詞の用言性が無視さ  
れているからである。

小論では、数詞の用言性に重きを置き、しかも、数詞は数詞、量  
詞は量詞、というはつきりした分け方で、表層から深層へと、意味  
範疇に入って次節を論じて行きたい。

### 3. 数量詞句の共起制限

奥津氏は、かつて、例文<sup>22</sup>

<sup>22</sup> 太郎ハ 本3冊ヲ 買ッタ。

に於ける「本3冊」に触れ、次のように論じている。

(前略)「本3冊」は目的語として使われていたがこれと全く  
同じ機能は、主語の場合にしかないようだ。特に同格名詞構造  
から数量的表現が分離し、他の位置を取る転形は、原則として  
主語と目的語の場合に限られる。例えば、

<sup>23</sup> 学生5人が 先生ノ家ニ 来タ↓

学生が 5人 先生ノ家ニ 来タ

学生が 先生ノ家ニ 5人 来タ

など「学生5人」が主語であれば「5人」は転形ができる。と  
ころが主語でなく例えば手段を表わす名詞句であれば

<sup>26</sup> 私タチハ 自転車5台デ 湖ヲ 1週シタ↓

\* 私タチハ 自転車デ 5台 湖ヲ 1週シタ

<sup>27</sup> コノ絵ハ 筆1本デ 書イタ↓

\* コノ絵ハ 筆デ 一本 書イタ

のように「5台」「1本」などは分離できない。

何故主語と目的語の場合だけに数量的表現の分離転位が可能  
なのかは分らない。しかし同じ名詞でも主語や目的語の場合に  
は他の名詞とはちがう性格を持つこと——例えば係助詞のつ  
いた場合の格助詞の省略など——はよく知られて居り、数量的表  
現の場合も同様の現象であろう。(筆者下点)(註4)

言い換えれば、奥津氏は統語範疇で数量的表現の分離転位に於け  
る制限を処理しているが、その制限がなぜ起ったかははつきり指摘  
していない。

一方、柴谷方良氏も数量詞の遊離制限について論じ、

数量詞の遊離は統語範疇でなく、格範疇を対象とした現象であ  
る。(註5)

とし。

数量詞は主格名詞節及び対格名節からのみ遊離することができ  
る。(註6)

と、格範疇で数量詞の遊離に対する制限を記述している。

他方、井上氏は上述した主格と対格のほか、副目的格も必要で  
あると主張している。井上氏の副目的格とは<sup>23</sup>、<sup>24</sup>、<sup>25</sup>

②③? 加藤さんは旅行に参加する学生に数人電話した。

(11-30) (註7) (波線筆者、以下同じ)

②④私は団体客を泊める宿屋に2、3軒当ってみた。

(11-31)

②⑤ a 私は2つか3つの橋を渡ったと記憶している。

b 私は橋を2つか3つ渡ったと記憶している。

(11-32)

の「に」格と「を」格のように、自動詞を下位分離する——したがって、当該の自動詞と必ず共起する——格」(註8)である。

格範疇で扱った数量詞の遊離制限は、確かに統語範疇で扱ったそれよりも綿密であるが、なぜ数量詞は遊離制限を受けなければならないのか、その考察は欠如に付されている。

結局、数量詞の分離転位にしろ、その遊離にしろ、ともに何らかの制限を受けるのである。これらの制限は言ってみれば、共起制限と変形制限とにつきるが、小論では、ただ共起制限を取り扱う。

さて、数量詞を形容詞(或いは形容動詞)に近い品詞と見た以上、井上氏の提案の意味素性格によれば、形容詞が「+状態」の指定を受け、「対象格」を要求するから当然、数量詞も「+状態」の指定で、「対象格」を求める。日本語においては、「対象格」を表わすには、格助詞「が」でもってするが、形容詞と共起する「対象格」は、統語的には、主語に立つのであるから、数量詞の「対象格」も「が」でマークされ、主語に立つのである。例えば、例文②⑥

②⑥ 赤い 本が 三冊デス

(統語範疇) (主語)

(格範疇) (主格)

(意味範疇) (対象格) (+状態)

の「本」は、統語的には主語であり、格的には主格であるが、意味素性格から考えると、「三冊」は「+状態」によって指定されているから、「対象格」の「本」を要求するのである。

さらに、数量詞の後に動詞が来る場合、その動詞がもし「+状態」でなければ、必ず「+状態」によって指定されるにきまっている。それが「+状態」の動詞、例えば、例文②⑦

②⑦ 赤い 本が 三冊 アリマス。

(統語範疇) (主語)

(格範疇) (主格)

(意味範疇) (対象格) (+状態) (+状態)

のような「ある」なら、数量詞とともに「対象格」を求め、その「対象格」は、格助詞「が」でマークされ、統語的には、「主語」に立つのである。それに対し、もし、数量詞のうしろに来る動詞が例文②⑧

②⑧ 赤い 本ヲ 三冊 買ッタ。

(統語範疇) (目的語)

(格範疇) (目的格)

(意味範疇) (対象格) (+状態) (-状態)

の「+状態」の「買う」なら、動詞「買う」も「対象格」を求め、数量詞も「対象格」たる「本」を求めるが、この「対象格」「本」は、数量詞によってではなく、後ろの動詞の如何によって、格助詞が決められ、「ヲ」でマークされる。というのは、数量詞「三冊」の本来の「対象格」「本」は、動詞「買う」の「対象格」「本」と同一なので、同一名詞削除規則により削除されるのである。

(註9)

他方、数量詞が求める「対象格」とその後に来る動詞が要求する「対象格」とは必ずしも一致するとは限らない。例えば例文<sup>29</sup>

②9 子供が 三人 本ヲ 買ッタ。

(統語範疇) (主 語) (目的語)  
(格範疇) (主 格) (目的語)  
(意味範疇) (対象格) (+状態) (対象格) (―状態)  
(動作主格) (動作)

においては、(+状態)数量詞「三人」の(対象格)が「子供」であり、「―状態」動詞「買う」の(対象格)が「本」であり、両者が重なっていないが、動詞「買う」がまた(+動作)によって指定され、(動作主格)「子供」を要求し、それが格的には「主格」、統語的には「主語」にでるのである。

一方、例文<sup>30</sup>

③0 子供が 三冊 本ヲ 買ッタ。

(統語範疇) (主 語) (目的語)  
(格範疇) (主 格) (目的格)  
(意味範疇) (―) (+状態) (対象格) (―状態)  
(動作主格) (+動作)

に於いては、(+状態)数量詞「三冊」と(―状態)動詞「買う」とがともに(対象格)「本」を要求し、この「本」はまた後の動詞「買う」によって「ヲ」でマークされ、動詞「買う」はさらに(動作主格)「子供」を要求し、この「子供」が「が」でマークされるのである。

このように、もう一度例文<sup>29</sup>、<sup>30</sup>を考え合せてみると、数量詞の共起制限を記述するに当って、形容詞に近い数詞と名詞との間の共起制限、及び、主名詞の高次概念である量詞とその主名詞との間の共起制限を合せて考えなければならぬのである。この二つの制限を試しに明文化して見ると次のようになる。

数詞と名詞との共起制限：

(+状態)でマークされる数詞が(対象格)の名詞と必ず共起する。この(対象格)の名詞は、後ろに来る動詞の(+状態)の如何により、「ガ」或いは「ヲ」でマークされる。

量詞と主名詞との共起制限：

数量詞の量詞は、数量詞に対する主名詞の高次概念であるので、両者の間に厳しい共起制限が働く。この共起制限は、一般的に規則性がないから、辞書でマークされなければならない。

例えば

主名詞	↓	量詞
人	(一)人 (二)方 (三)者	
動物	(一)匹 (二)頭 (三)羽	
細長いもの	(一)枝 (二)竿 (三)本	
薄くて平たいもの	(一)枚 (二)張 (三)重	(註10)

さて、上述した数量詞に関する共起制限でもって、奥津氏が出した

- ③① 私タチハ 自転車デ 5台 湖ヲ 1周シタ(110)②⑤  
 \* ③② コノ絵ハ 筆デ 1本 書イタ(110)②⑦

画、例文がどんな制限を破って非文法的文になるかをしらべてみると、  
 例文③①

私タチハ 自転車デ 5台 湖ヲ 1周シタ

〔＋状態〕

〔動作主格〕〔原因格〕 〔起点格〕〔＋動作〕

において、数量詞「5台」の〔村象格〕が起らないから、非文法的な文になる。一方、例文③②

コノ絵ハ 筆デ 1本 書イタ

〔＋状態〕

〔対象格〕〔原因格〕 〔＋動作〕

においては、〔＋状態〕数量詞「1本」が〔対象格〕「コノ絵」と共起しているが、主名詞「絵」が薄くて平たいものであるので、その量詞は「枚」「張」などでなければならぬ。言い換えれば、主名詞「絵」と量詞「本」が共起制限を破っているので、非文法的な文になるのである。

他方、井上氏は意味解釈の立場から、例文③③

- ③③ \* 子供には数人この文が復唱できる。

の非文法性について、次のように解釈している。

主格に格助詞「に」が与えられている場合には、難易文に関して見たとあり、話者の視点の目標となりえない。したがって、

数量詞の領域の指定を受けることができないのである。(註11)

つまり、井上氏は話者の視点の概念を導入し、③③の非文法性を説明しているが、「話者の視点の問題については未解決の問題が多い」(註12)から、果して数量詞の領域指定と話者の視点とは関係があるどうかは今後の考察に委ねねばならないが、意味範疇で数量詞の共起制限をもつて、例③③の非文法性を説明すると簡単にけりがつくのである。例文③③

子供には 数人 この文が 復唱できる

〔動作主格〕 〔＋状態〕 〔対象格〕 〔＋状態〕 〔＋動作〕

に於いては、数量詞「数人」と〔対象格〕「この文」とが共起しているが、両者は共起制限に抵触するので、非文法的な文になるのである。

ところで、上述した井上氏論文からの例文②③、②④、②⑤は、数量詞の共起制限を破ったと見えても、許容文として受けとめられる。そのわけはどこにあるのか、というと、②③、②④、②⑤の波線部は、深層構造においては、〔対象格〕と勘定しても差しつかえないからである。

例文②⑤の動詞「渡る」は、一般には自動詞と見られているが、自、他動詞の概念をふりすてて、意味素性格の立場から見ると、例文③④、③⑤の動詞「食べる」と「渡る」は

- ③④ ご飯ヲ 食べる  
 〔対象格〕

③⑤ 橋ヲ 渡る

〔対象格〕

ともに「対象格」を要求するのである。例文②⑤の、意味素性格による分析は、例文②④についても同じことが考える。例文③⑥

③⑥ 宿屋ニ 当る

〔対象格〕

に於ける「宿屋」は、深層的には、「対象格」によって指定されるのである。

さて、例文②③

②③ ? 加藤さんは旅行に参加する学生に数人電話した。

の解釈になると、ちょっとややこしいが、意味素性格の立場から説明されないわけではない。井上氏によると、例文②③の『許容度に個人差があるのは、「学生に電話をする」というふうに、間接目的語、直接目的語と分析される』（註13）という。となると、深層的には、さらに「学生に電話をする」を、例文③⑦

③⑦ 学生ヲ 電話ヲ する

〔対象格〕〔対象格〕

のように、二重対象格構文と分析できる。

ところで例文③⑧

③⑧ \* 私はこの辞書を少年たちに数人プレゼントした。

(111-29)

も、

③⑨ \* 私はこの辞書ヲ少年ひちヲ数人プレゼントした。

〔対象格〕〔対象格〕〔+状態〕

のように、二重対象格構文であるが、なぜ非文法的な文にされるのか、というと、それは「プレゼントした」はさらに「プレゼントした」と分析することができる。例文③⑧、③⑨のような二重対象格構文ではなく、実際は、例文④⑩

④⑩ \* 私はこの辞書ヲ少年ひちヲ数人プレゼントした。

〔対象格〕〔対象格〕〔対象格〕

のように、三重対象格構文と分析されるから、非文法的な文にされると解釈されよう。

こうなると、上述した数詞と名詞との間の共起制限は、次のように修正しなければならない。

数詞と名詞との共起制限

〔+状態〕でマークされる数詞が〔対象格〕の名詞と必ず共起するが、この〔対象格〕の名詞が二重にでも構わないが、三重なら許されない。なお、この〔対象格〕の名詞は、後ろに来る動詞の〔+状態〕の如何により、格助詞「ガ」「ヲ」でマークされるが、「ニ」でマークされる場合もある。

#### 4. 結びに

これまで三節にわたって数量詞について考察して来た。第一節では、数量詞の分佈状況を検討し、第二節では、「ネクサス」の概念を導入し、数量詞の本質は形容詞或いは形容動詞に近いことを立証



した。第三節は第二節の帰結にもとづいて、意味範疇で（＋状態）という意味素性格でもって数詞を指定し、数量詞句の共起制限を記述した。

註  
釈  
：

- 2 : 奥津一九六九、四六ぺ。
- 3 : 池上一九八〇、一五八ぺ。
- 4 : 奥津一九六九、四八、四九ぺ。
- 5 : 柴谷一九七八、二四七ぺ。
- 6 : 柴谷一九七八、二四六ぺ。
- 7 : 井上論文からの例を、I (x)、のように示す。以下同じ。
- 8 : 井上一九七八、一七四ぺ。
- 9 : 図で書き表わすと、次のようになろう。

## 主な参考文献

## 主な参考文献